

「3月11日」

日本 DMAT 隊員 本館3病棟 看護師 奈良輪 弘美

～～～ まさに、今が、災害の時だ ～～～

地震発生時は自宅にいたが、家族の無事が確認されたので、病院へ向かった。福島赤十字病院の DMAT の一員として南相馬市立総合病院へ向かい、津波で溺れた患者を福島県立医科大学まで緊急搬送した。搬送中のさまざまなアクシデントを何とか乗り越え、命をつなぐことができた。人生の中で一番長く感じた夜であった。

3月11日は、深夜明けで、病棟の歓送迎会が予定されていた。駐車場で「また、後で」とあいさつし、自宅にもどり14時頃まで仮眠した。起きると、居間には、母親、妹、姪っ子、甥っ子がいた。突然、エアメールがなり、地震が始まった。すぐに治まるかと思っただが、だんだん揺れが大きくなり、長く続き、家の中にいることに危険を感じ外にでた。自宅の窓ガラスがガタガタゆれ、電柱がゆれ、電線が浪打、瓦屋根が落ちてくる光景に恐怖を感じた。ゆれが納まるまでしばらく、外にいた。家族の無事を確認できたので、病院に向かった。途中メールが入り、「DMAT 福島医大病院参集」と。道路は渋滞しており、4号線は通行止め、1時間かけて病院に到着した。急患室に到着すると、DMAT出動が決定されており、感染病棟で、懐中電灯の光をたより救護着に着替えた。まさに、今が、災害の時だと感じた。

渋滞のなか、サイレンをならし、車と車のなかを割って福島医大病院に到着した。南相馬病院で応援要請あり、当院に戻り器材を準備し、22時頃当院を出発した。途中、雪が降っており、道路も圧雪状態であった。山間をサイレンをならしながら0時ごろ南相馬病院に到着した。

病院関係者とミーティングを行い、身元不明、溺水の患者を医大病院に搬送することになった。救急車内では、点滴スタンドを足で押さえながら、血圧測定や、サクション、トリアージタックの記載を行った。搬送途中、装備されている酸素が不足しそうな状況になったり、血圧が測定不可となり輸液を全開で投与、昇圧剤のスピードを変更したり、渋滞に巻き込まれ迂回したり等アクシデントをなんとかのり越え、2時間のアンビュウ加圧の末、医大病院まで搬送した。医大病院に到着し、急患室の明るさ、医療器材があること、医療者の姿に安堵し、命をなんとかつなぎ、引き継ぎ出来た。そして、また、南相馬病院にむけて出発した。・・・

3月11日のことが、今でも、その時の状況が時間とともに鮮明に思い返せる。私の人生で一番長く感じた夜である。